

ことに由来し、郷土人形・茶山人形にもその名が使われている。

いかにも「昭和の商店街」といった趣の、歩道の上にしつらえられた申し訳程度の屋根の下を北へ向かう。道はなだらかにのぼり、やがて下りつつ左へと曲がっている。平坦で、直線的な商店街よりもずっと味わい深い。

ところが、ほとんどの店がシャツターを下ろしたままだった。ときおり時代の流れから取り残されたような床屋や小さな商店が明かりをつけているだけで、道行く人の姿もない。

と、下り坂の途中に店を開けている酒屋さんがあった。間口を開け放し、あいた酒樽をテーブルがわりに、店の奥さんとお客さんが談笑している。

店をのぞいた地井さん、「この辺、今日は定休日なんですか？」と奥さんにたずねた。

「いいえ、いつもこうなんですよ。昔は本当ににぎやかだったんですけどねえ——」

南は晋作通りとして振興に努めてい

る豊前田商店街と交わり、北は長門市場やグリーンモールにつながる茶山通りは、下関駅前の「ショッピング回廊」ともいべき位置にある。

実際、昭和30年代から40年代にかけてはかなりのにぎわいだったようだが、漁業と造船業の衰退、そして大型商業施設の進出とともに、客足は次第に遠のいていった。

それは、茶山通りの先にある長門市場にしてもおなじだ。昭和の終わりのまでは東京・上野のアメ横をしのぐ盛況ぶりだったというが、いまでは鮮魚店

や肉屋、衣料品店が数軒開いているだけ。もっとも、旅行者として気ままに散策を楽しむ身にとっては、そのひなびた感じもまた味わいになるのだが。

「日本中の人に愛されるコリアンストが つくれなかな」

「グリーンモール」

線路を挟んで長門市場の反対側には、並木と歩道のブロックが美しいグリーンモールがある。このあたりでは唯一活気のある商店街で、いまや珍しい鯨肉を扱う店や、鮮魚店、八百屋な

「商店街には物じやなくて、 会話を買いに行くんだよね」





「あの角を曲がるとどうなっているのかって考えながら歩くとおもしろいよね。たぶんまた、次の角が見えるだけなんだろうけどさ」

地井さんは、見通しのきかない道を迷路に見立てて楽しんでいる。

「あ、花がある」

角を曲がると、ある家の門に続く石段にピンクの草花が植えられていた。そばにはたくさんのドングリが落ちている。

「季節感が味わえる道って、いいなあ」
ときおりすれ違う地元の人たちは、地井さんが「あの地井さん」だと気づかないままに「こんにちは」と声をかけてくれる。その自然さが、とてもすがすがしい。おなじように「こんにちは」とあいさつを返した地井さんは、さらに迷路の奥に入っていく。

知る人ぞ知る

いかにも昭和の商店街

【茶山通り／長門市場】

迷路散歩を抜けると茶山通りに出た。通りの名前は周辺に茶畑があった